【茨城】筑波研究学園都市・つくば市から発信するホスピタルアートの今とこれから- NPO法人チア・アートの代表・岩田祐佳梨氏、筑波メディカルセンター病院の病院長・軸屋智昭氏に聞く◆Vol.2

2019年9月3日 (火)配信 m3.com地域版

2007年より、筑波大学芸術系との協働によりアート・デザイン活動を実践し続けている筑波メディカルセンター病院。これまでのさまざまな取り組みから見えてきた、ホスピタルアート実施における課題や展望について、同病院からアートコーディネート業務を委託されているNPO法人チア・アートの代表・岩田祐佳梨氏と、病院長・軸屋智昭氏に話を聞いた。（2019年4月19日インタビュー、計2回連載の2回目）

▼第1回はこちら

――実際にプロジェクトを実施し、病院関係者や患者さんの反応はいかがでしたか。医療現場においても何か影響はあったのでしょうか。

岩田　いろいろな活動を何年か繰り返していたのですが、患者さんからは概ね好評でした。その一方で、活動当初は、無関心の職員がいたり、「なぜ、このようなものにお金をかけるのか」といった意見を寄せたりする職員も多かったと聞いています。ですが、改善した空間を通る患者さんの表情に変化があったり、患者さんからの意見を募る投書箱に賛同する声を複数いただくようになったんです。そうした周囲の変化から、「こういうものって必要なんだ」という認知が職員の中でも生まれ、受け入れられるようになったのではないかと考えています。こうした意識の土壌ができると、飾るだけではなく一緒にコラボレーションをして何かしたいという心持ちが職員の中にも湧いてきて、病院食のすべり止めマットなどのプロダクトが企画・開発されるようになったんです。

また、職員の方たちがよくおっしゃるのは、勤務し始めた当初は違和感があった院内環境が、職場が日常になると“おかしさ”に気づかないということです。だから、プロジェクトを通して一緒にコラボレーションをすると、視点の違いに気づかされたり、「確かにそうだよね」と立ち返る機会になったりするのがコラボレーションの良い点だと言ってくれますね。最近では、お金や時間のかかる空間改善も、工夫しながら一緒にやっていきましょうという姿勢が、職員の中でも見られるようになっています。

奥まった場所にある休憩スペースへの誘導を分かりやすくするため、サインを改良

軸屋　最初は、ひどいもんでしたよ。「無駄なお金を使って…」等いろいろな意見が出ました。ですが、今はアートコーディネーターの存在も院内に良く知れ渡っていて、「何かデザインしたい、変えたい」といった要望が出た時は、アートコーディネーターも一緒に入ってほしいという言葉が職員側から直接聞かれます。

患者さんからは、「居心地が悪い」などの感想は出ますが、「ここをこうしてほしい」といった要望は職員から出ます。ただし、その職員の言っていることが必ずしも正しいとは限らないんです。そこにアートコーディネーターが、いろいろな方法でフィルターをかけて、いい方向に持って行ってくれます。

岩田　職員の方たちも、切り取った「自分フィルター」で患者さんや周囲の様子を見ていたりするので、一部の職員の意見だけを忠実に聞いているだけだと、フィルターに写らない患者さんを取りこぼしてしまう可能性もあります。観察調査や複数の職員へのヒアリング調査をして、客観的に現状を捉えることで、「患者さんは実はこんな過ごし方

をしていたんだ、こんなことに困っていたんだ」ということが分かり、職員の方にとっても刺激になっているようです。

柔らかい印象のカーテンをオリジナルで制作し、空間の雰囲気を変えた「ひだまりラウンジ」

軸屋　この10年の活動の中でそういった方法論をアートコーディネーターである彼女たちが編み出していったんです。職員が要望してくるものをそのまま形にすると、大概駄目です。アートコーディネーターたちは調査のノウハウを身に着けていて、「これはこうしたらいい」という感覚が分かっているようですね。

　それから患者さんへの影響については、実施後のアンケート調査を見るとネガティブなものはあまりないようです。でもパーフェクトな満足度が得られているかというと、そうでもない、取り組んできた活動の真の成果はまだ良く分からないというのが現状です。ただ、直近のエントランスを改修した「ひのきこまち」プロジェクトですが、あれは患者さんにすごく利用されていますね。活動したことが本当に役立っているかどうかは、今後1、2年経って見てみると分かるのではないでしょうか。

――今日の医療現場におけるアート活動の普及状況について、どのようにお考えでしょうか。

岩田　日本では、アートやデザインのプロジェクトを専門でコーディネートする人や団体が病院に入り、継続的にアート活動や環境改善に取り組んでいる事例は、まだ少ないのが現状です。代表的な病院は、香川県にある四国こどもとおとなの医療センターでしょうか。森合音さんというアートディレクターが、病院を新築で建てるときから携わっており、その後も継続的に環境改善に取り組んでいるので、医療現場でのアート活動が職員、患者さん、地域の人々に根づいているように感じます。

軸屋　四国こどもとおとなの医療センターさんは、良い意味で特殊だと思います。建物そのものが、建設段階からそういったコンセプトで作られています。そうした方法は理想なのですが、費用や機会の面で、めったに巡ってくるものではありません。羨ましい限りですが（笑）。当院で行っている既存施設に対する環境改善のやり方は一般的で広まり易いと思っているので、当院での活動を通して組織化やプロダクト生成の手法をちゃんと形作っていきたいと考えています。

岩田　芸術系の学生の教育現場として開いてくださったのは、先代センター長の中田先生の力だったと思いますが、大学が病院の近くにある地域特性として、学生が入ってきていいよという実験的な試みができる文化がありました。地域の人々、学生、アーティストなど、医療者以外に病院づくりを開き、実験的にアートやデザインの活動に取り組みながら、病院の環境を良くするための対話をしていくことで、いきいきとした病院環境が生まれるのではないでしょうか。

色々な気持ちを書き込んだ「気持ちゴブリン」を広場に掲示し、鑑賞者を楽しませる「あふれる気持ちゴブリン」

――医療現場におけるアート活動を実施するために、必要なことは何でしょうか。

軸屋　まずは、コーディネートできる人を入れることですね。あとはやっぱり、病院側のリーダーがそれに興味がないと前に進まないと思います。でも、大抵の病院長は何とかしたいと思っていますよ。それにどれくらい時間を割くかの問題だと思いますけども。当院は民間ですが、公的病院の場合ですとなかなか予算がとれなかったり許可が下りなかったりするようで、意外に動きにくいといった側面もあるようです。

岩田　現場の医師や看護師の方が何かをやりたいと盛り上がっても、病院経営者と話をしていないと活動を進めたり、定着させることが難しいです。経営的視点から、病院の施設整備や広報戦略としてどのようにアート活動を捉えるかということと、現場職員がどのようなことにニーズを感じているかを、両側面からつき合わせて考えていかなければならない点も重要だと思います。

　それから、一緒にアイデアを出し合ったり、作ったりする過程を楽しいと思ってもらうことが、こうしたプロジェクトを継続させるコツかなと思います。職員も単に上からの指示で協力しているだけというやらされ感を感じたり、知らない分野の人が自分のテリトリーに入ってきて荒らされるという認識になると続いていかないので、みんなが活動を通して何かを学び、前向きな意識で取り組めるようにプロジェクトをマネジメントすることが大切だと感じています。

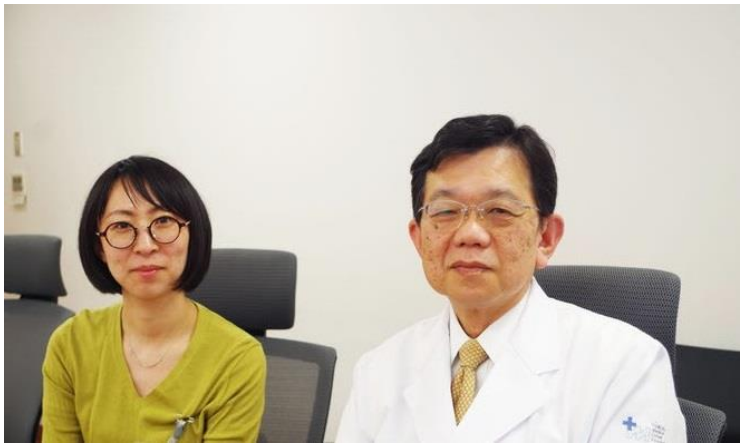
2014年にワークショップで制作した「さくらゴブリン」の展示（写真提供：筑波メディカルセンター病院）

――今後、どのようにプロジェクトを発展させていかれるのか、今後の展望についてお聞かせください。

軸屋　これまでの取り組みからスタンスはだいたい分かっているので、病院が大きな建て替えをしようというときには大々的になるでしょうが、そういったことがない限り、今までのことを繰り返していくだけです。個人的には、チア・アートというNPOを育て、全国に発信できるような形にすることを目指したいです。チア・アートのような組織が全国にできてこないと、院内にただ絵画や彫刻を飾るだけのホスピタルアートではなくて、病院の中身を良くしていく本当の意味でのアート活動というのは広まらないと思います。あとは、NPOがアートコーディネーターとして実

施したさまざまなプロジェクトを、いろいろな病院に見に来てもらうモデルケースになる、というのが当院の役目だと思っています。

岩田　外部にこの活動の価値を発信していくために、アート活動のアウトカムを示したいと思っています。例えば、患者さんのQOL向上に対する影響はあるのか、職員の皆さんが病院に愛着を持てるようになり、病院組織の活性化に繋がっているのか。あるいは、継続的な改善によって全体的に病院が整備されることが、病院経営にどのような影響を与えているのか。これまでの活動を通して生まれた仮説を検証していく時期だと思っているので、研究的な視点と実践的な視点を兼ね備えてやっていきたいなと思っています。



左：岩田祐佳梨氏、右：軸屋智昭氏

◆岩田 祐佳梨（いわた・ゆかり）氏

NPO法人チア・アート代表。
2011年より財団法人筑波メディカルセンターのアートコーディネーターとして活動しながら、病院と作り手の協働によるアート・デザイン活動についての実践研究を行ってきた。2017年に筑波大学人間総合科学研究科博士後期課程を修了、博士(デザイン学)を取得。2018年、東京工芸大学工学部建築学科助手に着任。現在、大学教員を務める傍ら、2017年に自身が設立し理事長を務める特定非営利活動法人チア・アートの活動に従事。
2018年、公益財団法人筑波メディカルセンターからの委託を請け、チア・アートはアートコーディネート業務を担っている。

◆軸屋 智昭（じくや・ともあき）氏

1981年、筑波大学医学専門学群卒業。2003年、筑波メディカルセンター病院の診療部長 (心臓血管外科)、2005年には同副院長を務め、2009年に筑波メディカルセンター病院長に就任。就任時より、筑波大学芸術系とのアートプロジェクトに関わる。2017年、特定非営利活動法人チア・アートの理事に就任。
現在、公益財団法人筑波メディカルセンター業務執行理事を兼務し、つくば市医師会副会長も務める。心臓血管外科専門医、日本外科学会指導医。
所属学会は日本胸部外科学会、日本心臓血管外科学会、日本血管外科学会、日本医療マネジメント学会。

取材・文・撮影／河田早織